

家持の「怨」

池田三枝子

序

家持の文学観が形成された越中時代、家持とその朋友との間で交わされた贈答書簡には「怨」なる語が散見する。

即ち、天平十九年二月、四月の大神池主との二つの贈答書簡（卷十七・三九六五〜三九六八、卷十七・四〇〇六〜四〇一〇）及び天平勝宝二年四月の久米広繩との贈答書簡（卷十九・四二〇七〜四二一〇、以下、対広繩書簡と称す）の例である。

三種類もの贈答書簡で「怨」の語が用いられていることは注目されてよい。宴席歌や独詠歌と異なり、複数の享受者もしくは不特定の享受者を想定する必要のない贈答書簡に於いては、それを読む特定の相手との関係性に基づく、独自の装いや構えといったものが存在するからである。し

かも、その相手が越中歌壇に於いて家持と文学的交友を有する人物であれば、そこに家持の文学観が表現されている可能性は高い。

就中、対広繩書簡では、家持自身が題詞・歌の双方に「怨」の語を用いているので、家持の文学観が特に色濃くあらわれていると考えられる。

そこで本稿では、この対広繩書簡の「怨」の考察を通して、家持の文学観・交友観の一端を探ってみたい。

一 問題点の整理

廿二日、贈判官久米朝臣広繩賀鳥怨恨歌一首并短歌

ここに於て　そがひに見ゆる　我が背子が　垣内の谷
に　明けされば　榛のさ枝に　夕されば　藤の繁みに
はるはるに　鳴くほととぎす　我がやどの　植る木橘

花に散る 時をまだしみ 来鳴かなく そこは怨みず
然れども 谷片付きて 家居せる 君が聞きつつ 告
げなくも憂し (巻十九・四二〇七)

反歌一首

我がここだ待てど来鳴かぬほととぎすひとり聞きつつ
告げぬ君かも (巻十九・四二〇八)

詠霍公鳥歌一首 并短歌

谷近く 家は居れども 木高くて 里はあれども ほと
ととぎす いまだ来鳴かず 鳴く声を 聞かまく欲り
と 朝には 門に出で立ち 夕には 谷を見渡し 恋
ふれども 一声だにも いまだ聞こえず (巻十九・四二〇九)

藤波の茂りは過ぎぬあしひきの山ほととぎすなどか来
鳴かぬ (巻十九・四二一〇)

右、廿三日掾久米朝臣広繩和。

右の家持詠については、従来、家持のホトトギスに對する
愛着だけが強調されてきた観がある。

題詞「霍公鳥怨恨歌」の訓みについても、「霍公鳥を怨
恨むる歌」と訓んで、家持のホトトギスへの思いを主題と
見る論が少なからず存する⁽¹⁾。また、家持長歌が「鳴かぬホ
トトギスが怨めしいのではなく、ホトトギスの声を聞きな
がらそれを告げようとせぬ久米広繩が怨めしいのだ」と述

べる点についても、家持のホトトギスに對する溺愛の情が
そうさせているのだと解される場合が多い⁽²⁾。

つまり、ホトトギスに對する強い思いがこの作歌の動機
であり、主題であると解されてきたのである。

確かに、「そこは怨みず」とは言いながらも、家持の中
にホトトギスの鳴かぬことを怨む心情があることは否定で
きない。家持のホトトギス詠の類のない多さからして、家
持にホトトギスへの強い執着があつたことは周知の如くて
ある。更に、次の①④のような、ホトトギスの鳴かぬこ
とへの怨みを題詞に記す歌の存在から考えて、鳴かぬホト
トギスへの怨みの心情が家持詠の根底にあつたことは動か
ないと言える。

① 大伴家持 霍公鳥晚喧歌二首

(巻八・一四八六題詞)

② 立夏四月、既経累日、而由未聞霍公鳥喧。因作 霍

歌二首

③ 更怨霍公鳥 晚歌三首

(巻十九・四一九四題詞)

④ 限霍公鳥不喧歌一首

(巻十九・四二〇三題詞)

しかし、当該歌の「怨み」が、ホトトギスのみに向けら
れているとは考え難い。題詞「霍公鳥怨恨歌」は、漢文の
語順からすれば、「霍公鳥の怨恨歌」と訓まれるはずであ
り、「霍公鳥を怨恨むる歌」とは訓み得ない。また、家持

長歌の文脈上、家持の怨んでいるのは広縄であつてホトトギスではない。更に、この歌は広縄という特定の個人に披瀝するための述作であり、宴席歌でも独詠歌でもないという点で、右の①～④に挙げたような、他のホトトギス詠とは状況が異なる可能性がある。加えて、①～④のホトトギスの鳴かぬことへの怨みを題詞に記す歌の場合は、怨む理由が、波線部のように「晚く喧く」「未だ喧くを聞かず」「啼くことの晩き」「喧かざる」と明示されている。それに対して当該歌の題詞では、「霍公鳥怨恨歌」という独自の在り方をしているのである。

そこで、この歌の内容を検討する事により、ここで家持の言う「怨み」が如何なるものであつたのかについて改めて考えてみたい。

二 歌の検討

長歌の冒頭「ここにして そがひに見ゆる 我が背子が垣内の谷に」で、家持は、広縄の館のある「垣内の谷」を「ここにして そがひに見ゆる」と表現している。

「そがひに」という語については、従来「後ろに」「背後に」等と訳出されてきたものを、小野寛氏が「歌を贈る相手に対して、その歌の冒頭にその相手の館を『ここからは後ろに見える』とは言わせたくない」として、「そがひ」

の用例を検討した上で、「遠く離れゆくイメージ」として³⁾いる。

また「ここにして」については、類句「ここにありて」を含めて、『万葉集』中に次の⑤～⑦の用例がある。

- ⑤ここにして家やもいづち白雲のたなびく山を越えて
来にけり (巻三・二八七 石上麻呂、志賀行幸時)
- ⑥ここにありて筑紫やいづち白雲のたなびく山の方に
しあるらし

- (巻四・五七四 大伴旅人、沙弥满誓への和歌)
- ⑦ここにありて春日やいづち雨つつみ出でて行かねば
恋ひつつそ居る (巻八・一五七〇 藤原八束)

⑤は石上麻呂が行幸先の志賀から、山のかなたにある家を目指す望郷歌である。⑥は都にいたる大伴旅人が、筑紫にいたる沙弥满誓から贈られた歌に答えて、遙かに離れた筑紫を思う歌である。こうした例から見ると、「ここにして」というのは、「ここ」即ち自分のいる位置を基点として、対象の遠さを述べる場合の常套表現と見ることができるといえる。⑦の藤原八束の歌では、実質的には平城京からそう離れてはいない郊外の地、春日に対して、雨に降り込められて春日野に遊ぶことなど望むべくもないという状況下で、「春日やいづち」(春日がどこにあるのかもわからない)と詠まれている。この例に於いては実際の距離が問題なのではなく、

心情的に対象が遠く感じられているのだと言えよう。当該歌の場合は、「いづち」と言う代わりに「そがひに見ゆる」と詠まれている。対象である広縄の館は家持の可視領域内にあつたと推定されるので、⑦と同様に、実際の距離というよりはむしろ、家持の心情として広縄の館が遠く感じられているのだと考えられる。

以上より、「ここにしていそがひに見ゆる」とは、家持にとつて広縄の館が心情的に遠く離れて感じられることの実現であることを、まずは確認しておきたい。

次に家持は、その広縄の館で鳴くホトトギスについて「明けされば 榛のさ枝に 夕されば 藤の繁みに はろはろに 鳴くほととぎす」と詠んでいる。これをそのまま信じれば、この歌に和した次の久米広縄の長歌に「谷近く家は居れども 木高くて 里はあれども ほととぎす いまだ来鳴かず」とあるのと齟齬をきたす。つまり、家持はホトトギスが鳴いたと言ひ、広縄は鳴いていないと主張していることになるのである。それ故、その齟齬を解消するために、諸注の解釈は分かれている。

① ホトトギスの声を広縄が聞いた（と家持が推量している）

② ホトトギスの声を家持が聞いた

① 説の場合、家持はホトトギスの声を聞いていないこと

になり、広縄詠との齟齬は解消する。② 説では家持と広縄の主張に食い違いが生じることになるが、その点に関して、② 説をとる『全集』の頭注では「家持の空耳である」と説明されている。

「はろはろに 鳴くほととぎす」という表現について考えてみると、「はろはろに」という語は、「はろはろに 言そ聞こゆる 島の藪原」という『皇極紀』の童謡を初見として、『万葉集』には⑧～⑬の用例がある。

⑧ はろはろに思ほゆるかも白雲の千重に隔てる筑紫の国は（巻五・八六六 吉田宜、大伴旅人への書簡）

⑨ はろはろに思ほゆるかも然れども異しき心を我が思はなくに（巻十五・三五八八 遣新羅使歌）

⑩ 難波瀉漕ぎ出る舟のはろはろに別れ来ぬれど忘れかねつとも（巻十二・三一七二）

⑪ へろはろに 家を思ひ出 負ひ征箭の そよと鳴るまで 嘆きつるかも

⑫ く方度 顧みしつ つ はろはろに 別れし来ればく（巻二十・四三九八 大伴家持、防人歌）

⑬ 詠霍公鳥并藤花一首 并短歌

桃の花 紅色に にほひたる 面輪のうちに 青柳の 細き眉根を 笑み曲がり 朝影見つつ 娘子ら

が 手に取り持てる まそ鏡 二上山に 木の暗の
繁き谷辺を 呼びとよめ 朝飛び渡り 夕月夜 か
そけき野辺に はろはろに 鳴くほととぎす 立ち
潜くと 羽触れに散らす 藤波の 花なつかしみ
引き攀ぢて 袖に扱入れつ 染まば染むとも

(卷十九・四一九二)

ほととぎす鳴く羽触れにも散りにけり盛り過ぐらし
藤波の花 (一に云ふ、「散りぬべみ袖に扱き入れつ
藤波の花」)
(卷十九・四一九三)

同九日作之。

⑧の吉田宜の歌は、都にいる宜が、大宰帥大伴旅人のいる筑紫を非常に遠く感じると詠むものである。⑨⑩は逆に故郷を離れた者の望郷の念の表現であり、異郷にあつて遙かかなたの故郷を思うという内容を持つものである。こうした例に照らしてみると、「はろはろに」とは自分のいる所を基準として、思う対象が遙かに離れていると感じられる場合に用いられる語ということになる。

仮に、広繩が自らの館で鳴くホトトギスの声を聞くことを詠むのであれば、「はろはろに」なる語は用いないはずである。ここは、やはり、「はろはろに」鳴くホトトギスの声を、家持が遙かに聞いた(②説)と取るべきであろう。前に述べたように、家持は広繩の館を心情的に遠く感

じていた、それ故に、そこで鳴くホトトギスの声を「はろはろに」と表現したと考えられる。

当該歌以前に、もう一例、家持が「はろはろに 鳴くほととぎす」と詠んでいる歌がある。それが⑬である。そこでは、幽かな夕景の中で鳴くホトトギスが「はろはろに」と表現されている。この例でも家持は、二上山で遙かに鳴くホトトギスに遠くから聞き入るといふ詠みぶりを示している。

ところで、⑬の歌の詠まれた天平勝宝二年には家持は集中して多くのホトトギス詠を成しているが、⑬のすぐ後には、次の歌がある。

更怨霍公鳥啼晚歌三首

ほととぎす鳴き渡りぬと告ぐれども我聞き継がず花は
過ぎつつ (卷十九・四一九七)

我がここだ偲はく知らにほととぎすいづへの山を鳴き
か越ゆらむ (卷十九・四一九五)

月立ちし日より招きつつうち偲ひ待てど来鳴かぬほと
とぎすかも (卷十九・四一九六)

ここには「我聞き継がず」「待てど来鳴かぬ」とあり、家持はこの年まだホトトギスの初音を聞いていないと見られることから、天平勝宝二年の、これ以前のホトトギス詠が、必ずしも現実に即したのではないことが、諸氏により指

摘されている。⁽⁷⁾ ⑬「霍公鳥と藤の花とを詠む歌」の「はろはろに 鳴くほととぎす」が家持の虚構であるならば、その数日後に詠まれた当該歌の「はろはろに 鳴くほととぎす」も、家持の空耳などではなく、はじめから現実に即さぬ虚構であった蓋然性は高い。⁽⁸⁾

そして家持は、そのホトトギスが自らの館では鳴かぬことを述べて、「そこは怨みず」と言い、題詞で述べられている所の怨む対象が、ホトトギスではなく、ホトトギスの声を聞きながら、それを家持に告げようとなしないうちで、そのことを明かすのである。「そこは怨みず」と言いながら、その根底に、ホトトギスが自分の館に来鳴かぬことを怨む心情があることについては前述したが、現実には即さぬホトトギスを自ら造型しておきながら、「君が聞きつつ 告げなくも憂し」と言つて広縄を怨むとは如何なることであろうか。

家持が広縄を怨む直接の要因は「告げ」ぬことである。そこで次に、ホトトギスの如き季節の風物を見聞きしたことを人に「告ぐ」ことの意味を考察してみたい。

橘のほへる園にほととぎす鳴くと人告ぐ網ささまし
を (巻十七・三九一八 大伴家持、平城旧宅作歌)
ほととぎす鳴き渡りぬと告ぐれども我聞き継がず花は
過ぎつつ (巻十九・四一九七 大伴家持)

右の家持詠に見えるように、詩歌の題材たり得る四季の風物を見聞きした時、それを人に告げるのは、風流たらんとする当時の貴族達にとつて、ある種のルールともいふべきものであったと考えられる。そしてそれを人に告げることは、その相手を誘うことにも繋がる。

我が宿の梅咲きたりと告げ遣らば来と言ふに似たり散
りぬともよし

(巻六・一〇一一 葛井広成家集宴歌 古曲)
月夜よし夜よしと人に告げ遣らば来てふに似たり待た
ずしもあらず (古今集) 卷十四・六九二 恋歌四)

右の歌には、梅・月の美しいことを人に告げ遣る事は、「来て下さい」と相手を誘うようなものであるとする認識が見られる。このような、相手を自分の方に誘つてその到来を待つ恋歌の発想を念頭に置くと、当該歌に於いて、広縄に向けられた家持の「怨み」とは、誘つてくれないことへの「怨み」であるとの見通しが立つ。

後期万葉の男性の官人同士の贈答に、恋歌的表現が多数見られることは、諸家の説くところである。男性同士がそうした恋歌的表現をとることについては、「誇張された親愛のことば」⁽⁹⁾「恋歌になぞらえて心の深さを表そうとする歌い方」⁽¹⁰⁾等と説明されている。最近では、家持と池主との贈答について「ホモセクシユアルな感情を認める」べきで

あるとする論もある。¹¹⁾

しかしながら、この広縄との贈答を、恋歌的発想との関わりのみで解釈するのには躊躇される。当該歌の場合、文脈上、家持の「怨む」のは久米広縄であるが、一方では、前述の如く、自らの館では鳴こうとしないホトトギスに対する「怨み」の心情があることもまた否定できないからである。当該歌の題詞が単なる「怨恨歌」ではなく、「霍公、鳥の怨恨歌」であることは、そうしたホトトギスに対する心情を物語る。つまり、当該歌に於いては、ホトトギスに対する「怨み」と、広縄に対する「怨み」が交錯しているのである。

この「怨み」の特異性は、よく似た題詞を持つ恋歌との比較により浮彫にされよう。

⑭ 大伴坂上郎女怨恨歌一首 并短歌

おしてる 難波の菅の ねもころに 君が聞こして
年深く 長くし言へば まそ鏡 磨ぎし心を 許し
てし その日の極み 波のむた なびく玉藻の か
にかくに 心は持たず 大舟の 頼める時に ちは
やぶる 神か放けけむ うつせみの 人か障ふらむ
通はしし 君も来まさず 玉梓の 使ひも見えず
なりぬれば いたもすべなみ ぬばたまの 夜はす
がらに 赤らひく 日も暮るるまで 喚けども 験

をなみ 思へども たづきを知らに たわやめと
言はくも著く たはらはの 音のみ泣きつつ たも
とほり 君が使ひを 待ちやかかねてむ
(卷四・六一九)

はじめより長く言ひつつ頼めずはかかる思ひにあは
ましものか
(卷四・六二〇)

卷四相聞部に配される⑭の坂上郎女詠に於いて、「怨恨」の理由は傍線部「通はしし 君も来まさず」「玉梓の 使ひも見えず」という所にある。恋人が来ない、使ひも寄こさないから相手を怨む。換言すれば、この怨みは、恋人が来れば解消する、或いは使ひが来れば解消する「怨恨」である。

一方、当該歌の家持の「怨み」は、相手に逢いさえすれば解消するような、恋の「怨み」とは性質が異なるのである。家持の「怨み」は、単に広縄に逢いさえすれば解消するというものではなく、広縄と共にホトトギスの声を聞かなければ解消しない。それも、ただ漫然とホトトギスの声を聞くのではなく、恐らく、広縄とホトトギスの声を聞く文雅の宴を共有せねばならぬのであろう(後述)。その点で、当該歌の「怨み」は、ホトトギスの鳴かぬことへの怨みを題詞に明示する歌(①)(④)とも異なり、また、聞怨詩の流れを汲むとも言われる恋の怨恨歌(⑭)とも異なつ

ているのである。

では、ホトトギスに対する「怨み」と人間に対する「怨み」とが交錯する当該歌の「怨み」とは、如何なる性格のものなのであろうか。そして、如何なるプロセスからこうした「怨み」の歌が詠まれるのであろうか。

それについて考察するには、宴席歌や独詠歌ではなく、当該歌同様、特定の個人に宛てた贈答書簡という枠組みの中で考える必要がある。前述の如く、贈答書簡に於いては、書簡の守秘性の下に、それを読む特定の相手との関係性に基づく、独自の詠法が為されるからである。そこで次に、家持の贈答書簡における「怨み」について検討してみたい。

三 家持の「怨」

次のA BとC Dは家持と池主との贈答書簡である。

A 守大伴宿禰家持贈掾大伴宿禰池主歌二首

忽ちに枉疾に沈み、累旬痛み苦しむ。百神を禱ひ
待み、且消損することを得たり。而れども由し身
体疼痛、筋力怯軟なり。未だ展謝に堪へず、係恋
弥深し。方今、春朝に春花は、馥ひを春苑に流し、
春暮に春鶯は、声を春林に囀る。この節候に對ひ、
琴罇翫ぶべし。興に乗る感あれども、杖を策くの
労に耐へず。独り帷幄の裏に臥して、聊かに寸分

の歌を作る。軽しく机下に奉り、玉頤を解かむこ
とを犯す。その詞に曰く、

春の花今は盛りに匂ふらむ折りてかざさむ手力もが
も
(巻十七・三九六五)

うぐひすの鳴き散らすらむ春の花いつしか君と手折
りかざさむ
(巻十七・三九六六)

二月廿九日、大伴宿禰家持

B

忽ちに芳音を辱みし、翰苑雲を凌ぐ。兼ねて倭詩
を垂れ、詞林錦を舒ぶ。以て吟じ以て詠じ、能く
恋緒を鯛く。春は楽しぶべく、暮春の風景最も怜
れぶべし。紅桃灼々、戯蝶は花を廻りて儂ひ、翠
柳依依、嬌鶯は葉に隠りて歌ふ。楽しぶべきかも
淡交に席を促け、意を得て言を忘る。楽しきかも
美しきかも、幽襟賞づるに足れり。豈慮りけめや、
蘭蕙藜を隔て、琴罇用あるところなく、空しく令
節を過ぐして、物色人を輕にせむとは。

忽むる所ここにあり、黙已ること能はず。俗の
語に云はく、藤を以て錦に続くといふ。聊かに談
笑に擬らくのみ。

山峽に咲ける桜をただ一目君に見せては何をか思は
む
(巻十七・三九六七)

うぐひすの来鳴く山吹うたがたも君が手触れず花散

らめやも

(巻十七・三九六八)

沽洗二日、掾大伴宿禰池主

C

入京漸近、悲情難撥、述懐一首^{并二絶}

(長歌一首、短歌一首〔巻十七・四〇〇六、四〇〇七〕省略)

右、大伴宿禰家持贈掾大伴宿禰池主。^{四月卅日}

D

忽見入京述懐之作、生別悲兮、断腸万廻、

怨緒難禁。聊奉所心一首^{并二絶}

(長歌一首、短歌二首〔巻十七・四〇〇八、四〇〇九〕省略)

右、大伴宿禰池主報贈和歌。^{五月二日}

A Bは天平十九年二月に交わされたもので、「山柿の門」の文学論を含む一連の応酬の冒頭の贈答である。Aの「悲歌」と題されている家持書簡の直前に、「忽ちに枉疾に沈み、殆に泉路に臨めり。よりて歌詞を作りて、悲緒を申べたる一首」と題され、病臥の悲しみを主題とする歌(巻十七・三九六二、三九六四)がある。そのため、前歌との題詞の類似から、A「悲歌」の主題も病苦の悲しみであると従来解されてきた。しかし、A「悲歌」の「悲しみ」とは池主と文学的交友を持ち得ないことに対する「悲しみ」であり、Aの書簡は交友をテーマとした作品として捉えるべきであることをかかつて述べたことがある。⁽¹²⁾三月三日の上巳

の宴を控えて、暮春の良辰に池主と共に花を手折りかざして遊ぶ文雅の宴を持ち得ない悲しみがこの作品の主題だということである。

池主もそうした家持の意を汲み、Bの書簡で、花が咲き鳥が歌う美しい時節に、一緒に春の風物を愛でることのできない二人の状況を述べて、「怨むる所ここにあり」という。ここで池主のいう「怨み」とは、単に家持と池主とが逢えないということではなく、また、単に花や鶯を愛でることができないということでもない。二人が同席して、共に花や鶯を愛でて漢詩や和歌を作るような文学的交友を持ち得ない、という「怨み」なのである。

CDはA Bの約二ヶ月後、家持が税帳使として上京する時期が近づき、家持・池主がしばしの別離を余儀なくされるという状況で交わされた書簡である。詳述の余裕は無いが、Cで家持が「悲情」と表現したものを、Dで池主が「怨緒」と捉え返しており、A Bの「悲歌」——「所怨」という照応との類似は瞭然である。

これらの贈答書簡から勘案するに、家持・池主間に於いては、文学的交友を持ち得ない悲しみを表現するのに「怨」の語が用いられていると言える。とすれば、当該書簡の「怨」も、広縄と共にホトトギスの声を賞翫し得ない、広縄と文雅を共有し得ないことを怨んでいるという点で、

池主書簡の「怨」と通底していることが指摘できよう。

四 へ離群の怨

文学的交友を持ち得ない悲しみを表現するにあたり、池主が「怨」という語を用いるのは、恐らく中国六朝の詩字に基づくと考えられる。

嘉会には詩に寄せて以て親しみ、離群には詩に託して以て怨む。(『詩品』序)

右は、梁の鍾嶸の著した文学評論『詩品』の序で、交友を契機として生み出される詩について述べた部分である。

「嘉会(逢い難い友との楽しい集い)」に於いては、詩によって親愛の情を表現し、「離群(友と逢えない)」という状況では、詩によって「怨」の感情を表現するのだ、という。六朝詩字に通曉していた池主の言う「怨み」とは、この「離群の怨」であったと思しい。

では、「離群の怨」とは、具体的には如何なる状況に於ける、如何なる感情を意味するのか。以下、『詩品』が論評を加えている詩人の作品を中心に、奈良朝貴族愛読の書たる『文選』の詩文を検討することにより、この問題を明確にしておきたい。

① 潘岳「賈謚の為に作りて陸機に贈る」

(『文選』卷二十四、贈答二)

自我離群 我群を離れし自り

二周于今 今に二周なり

② 謝靈運「池の上の楼に登る」

(『文選』卷二十一、游覽)

索居易永久 索居することは永く久しくなり易く

離群難処心 群を離れては心を処し難し

①②は『文選』所載の詩である。『文選』李善注は、いづれの「離群」にも、典拠として『礼記』檀弓篇の「吾群を離れて索居すること、亦已に久し」を引く。これは孔子の弟子子夏の言葉で、学問上の仲間と遠ざかって長い間独居していたことを反省するものである。これより、「離群」とは、本来そうあるべきではないのに仲間と遠ざかっている状態を意味する語であることが知れる。

①は、西晋の陸機が呉王に仕えて一時洛陽を離れた後、再び中央に復帰した際に、潘岳が賈謚の代作をした詩である。権力者賈謚の周囲には「二十四友」と称する文人グループが形成されており、潘岳・陸機もその一員であった。①の贈答詩は賈謚の文学サロンを媒介とするものであると考えられるが、「離群」は、賈謚がそうした文学上の友である陸機と逢えなかった状況を指している語である。

②は游覽部に載る宋の謝靈運の詩である。永嘉郡に左遷され、病臥していた謝靈運が、初春の風景を見て孤独感を

述べる部分に「離群」の語が見える。謝靈運の場合は、都の朋友と離れて永嘉に独居せねばならぬ寂しさを訴えているのであるが、その朋友とは、謝靈運自身が「永へに賞心の悟と絶れんとす」(『文選』卷二十六、「永初三年七月十六日、郡に之かんとし、初めて都を発つ」と述べていることから知れるように、「賞心の悟」即ち、共に山水を賞でることのできる詩友であった。謝靈運は、そのような友と離れて暮らさねばならない状況を「離群」と表現している。

潘岳・陸機・謝靈運は、『詩品』の上、中、下の分類の中で、いずれも上品に列せられる詩人である。こうした六朝詩に於いては、自らの意に反して文学的交友を持ち得ない状況が「離群」であった。そして、友との逢会を望んでも叶えられないという状況下に生ずる感情が「怨」である。

① 曹植「白馬王彪に贈る」

〔『文選』卷二十四、贈答三〕
汎舟越洪濤 舟を汎べて洪濤を越え
怨彼東路長 彼の東路の長きを怨む

② 陸機「弟士龍に贈る」(『文選』卷二十四、贈答二)

行矣怨路長 行かんとして路の長きを怨み
怒焉傷別促 怒焉として別れの促かなるを傷む

③ 陸雲「兄機に答ふ」(『文選』卷二十五、贈答三)

悠遠塗可極 悠遠なるも塗は極む可し
別促怨會長 別れの促かにして会ふことの長きを

怨む

④は、『詩品』上品に列せられる十二名の詩人の中でも最高の評価を受けている曹植の詩である。当時、雍丘王であった曹植は、都から任国への帰途、白馬王であった弟曹彪と同宿することを許されなかった。ひとたび帰国してしまえば、もう逢うことは叶わない。その時、二人を隔てる任国への距離を「怨」んでいる。

⑤⑥は、前述の陸機上洛の際、留まる弟陸雲と交わされた贈答である。この「怨」は④の曹植の「怨」を典故として、兄弟二人が遠隔の地に離れ、逢うことのできなくなる状況を「怨」むものである。

曹植・曹彪、陸機・陸雲は、兄弟ではあっても、各々魏の建安文壇、晋の太康文壇で活躍する詩友でもあった。

『芸文類聚』人部、友悌の項は、冒頭に『爾雅』の「善き兄弟は友たり」を引いた上で、①②③の詩を載せている。これらの例の「怨」という感情の内実は、文学的交友を持ち得ない状況に対する「怨嗟」である。

更に、右の如き「怨嗟」とはやや異なり、逢えない友に向けられる「怨」もある。

④ 屈原「九歌四首（其三）」

〔文選〕卷三十二、騷上

湘君

交不忠兮怨長

交はり 忠からずして 怨
長く

期不信兮告余以不聞

期 信あらずして余に告ぐ
るに聞あらざるを以てす

① 江淹「雜體詩三十首（其二十五）」

〔文選〕卷三十一、雜擬下

謝法曹（惠連） 贈別

子襟怨勿往 子襟は往く勿きを怨み

谷風誚輕薄 谷風は輕薄を誚れり

④は湘水の神「湘君」を呼び求める詩である。所引の箇所は「湘君」が約束を違えて現れぬことを嘆く部分で、諸注の解釈が分かれる所であるが、王逸注は、屈原が楚王を慕っているにも関わらず受け入れられぬ嘆きを歌うものであるとする。そして王逸は「交不忠兮怨長」に注して「交は友なり。忠は厚なり。朋友相与に厚からざれば則ち長く怨恨むなり」とする。朋友が心厚く交わろうとせぬときに「怨恨」むのだというのである。そしてここで注目したいのは、この「怨」が物理的距離に起因するのではなく、相手が心を同じうしてくれないという内的要因により生じて

いるという点である。④の詩に「離群」の語がある訳ではないが、前掲した『礼記』壇弓篇の「離群」の例からも窺えるように、このような状況も「離群」の範疇なのである。

①は宋の江淹が古今の詩人に擬して作った「雜體詩三十首」の中の一首である。謝惠連が別れに際して従兄の靈運に贈った「西陵にて風に遇ひ康楽に献ず」（『文選』卷二十五）に模擬している。所引の箇所は、友情の薄さを嘆く先行詩文を引いて、それとは異なる変わらぬ友情を期する部分である。李善注に拠れば、「子襟」とは、『毛詩』鄭風の「子衿」の詩を指す。「子衿」には「縦我往かざるも、子寧ぞ音を嗣ざる」の句があり、江淹の詩は、友の音信が無いことを嘆くこの詩句を典拠としているという。その時、江淹は音信をよこさぬ友に対する感情を「怨」と表現している。

かかる例からして、自分が逢会を希求し、音信を切望しているのに、相手が心を同じうせず、応えようとしてくれない時の感情が「怨」であると考えられる。この場合の「怨」とは、単なる嘆きや憤りではない。相手との交友を切望するが故の〈怨慕〉ともいうべき感情である。

以上より、鍾嶸の言う〈離群の怨〉とは、文学的交友を持ち得ないという状況下で、状況に対する〈怨嗟〉や友に對する〈怨慕〉を主題とする交友詩の在り方を典型化した

ものであると言えよう。

この六朝詩学の「離群の怨」が、池主の「怨むる所ここにあり」という表現の中に抱え込まれているのである。

「離群」の対象となる友は、単なる知己ではない。六朝詩学に於ける交友とは、文壇に於いて詩文を贈答し、文学論を戦わせて、切磋琢磨し合う文学的交友である。例えば、魏の文帝曹丕が「文章は経国の大業にして、不朽の盛時なり」(『文選』卷五十二、「典論論文」という文学論を述べる礎を作った建安文壇に始まり、潘岳・陸機が活躍した太康文壇や、王羲之が蘭亭の集いを行った東晋文壇や、謝靈運が山水詩を作って「賞心」の友を希求した元嘉文壇などに於ける六朝士大夫たちの文学的交友、これが『詩品』の言う交友である。

文学的交友といった時、家持がまず意識したのは、父旅人の筑紫歌壇であつたろうが、その先には、中国六朝の文人たちの交友が理想として望見されていたと考えられる。

中国文壇に対する憧憬は、或いは文雅を好む奈良朝貴族全般に見られる傾向と言えるかもしれない。が、家持の場合、池主との交友が契機となつてその憧憬がより強くなつたことは想像に難くない。

池主との贈答を通して、家持は「離群の怨」を作品に託すことを学んで行った。そして、池主が越前に転出した後、

池主の後任として来越し、かつて池主の住んでいた「垣内の谷」に今住んでいる広縄に対して、その「離群の怨」を主題として作つたのが、「霍公鳥の怨恨の歌」であつたと理解される。

家持は、広縄に対して、ホトトギスを共に愛でるような文学的交友を持ちたいと望んだ。しかし、広縄は心を同じうしてくれない。その「怨み」を作品として表現してみせたのである。心を同じうしてくれない相手の館であるからこそ、心理的に遠く離れて感じた。それを「ここにしてそがひに見ゆる」と表現して冒頭に置き、離群の「怨」を詠んだと考えられる。

当該歌に於いて、家持は、広縄に対する「怨み」とホトトギスに対する「怨み」とを、二つながら同時に述べる。それは坂上郎女のような恋の「怨恨歌」とも異なり、ホトトギスを怨む歌とも異なる。家持は、文芸の題材たり得るホトトギスを愛でながらの文学的交友を希求していた。その家持にとつて、「怨む」対象は、文芸の題材を提供してくれないホトトギスであり、且つ文学的交友を持つとうしない広縄である。そのことを端的に表すのが「霍公鳥の怨恨歌」という題詞である。単なる「怨恨歌」でもなければ「霍公鳥を怨む歌」でもなく、「霍公鳥の怨恨歌」なのである。この二つの相異なる対象に対する「怨み」は、離

群の怨」という観念を据えることによりはじめて理解できるのである。

結

文学的交友の希求に基づく〈離群の怨〉を主題とする家持歌に対して、「詠霍公鳥」と題される広縄歌はホトトギスのみに終始している。同じ〈離群の怨〉であっても、池主書簡の「怨」が逢えない状況に対する〈怨嗟〉であるのに比して、対広縄書簡の「怨」が心を同じうしない相手への〈怨慕〉であることに着目すると、家持歌と広縄歌のズレは広縄の力量不足に起因し、家持・広縄の交友は家持・池主の交友に及ぶべくもなかったのだと言えるかもしれない。とは言え、贈歌答歌のズレの妙味に眼目がある恋歌の在り方を考慮すれば、広縄は、家持の気持ちを重々承知の上で意図的にずらしたという可能性も否定し得ない。

しかし、本稿の目的は、家持・広縄の交友の如何ではなく、飽くまで「怨」なる観念の追究にある。各書簡の「怨」を敢えて訳出すれば〈怨嗟〉〈怨慕〉となるうが、突きつめれば、それは六朝詩文に端を発する交友の文学に集約される。つまり、「怨」とは家持の交友観・文学観に関わる感情なのである。家持の「怨」が文学観に関わるのであれば、家持の他の作品の解釈や作歌活動を考える上にも、

「怨」をキーワードとすることが有効となるはずである。その意味で、家持の「怨」の孕む問題は決して小さくないと言えよう。

注

- (1) 古典文学全集本、古典文学集成本、伊藤博士角川文庫本、後藤利雄氏「久米広縄とその歌」(『万葉集成成立新論』昭和六一年一月)等。
- (2) 「ほととぎすに對しては怨み得ずにあるのは、同じく溺愛の心から」(窪田空穂氏「評釈」)、「時鳥に寄せる強い憧れから、その声を一人占めにする相手を恨んでみせた」(『集成』)等。
- (3) 「『そがひに』考」(『大伴家持研究』昭和五五年三月)
- (4) 黒川総三氏「丹生の山と大伴池主の公館」(『万葉』八五、昭和四九年九月)等。
- (5) 「古義」、窪田空穂氏「評釈」、土屋文明氏「私注」等。
- (6) 「全集」、『集成』等。
- (7) 佐々木民夫氏「越中のホトトギス—家持のホトトギス詠を中心に—」(『盛岡短期大学研究報告』(家政・保育・共通編)三八、昭和六二年二月)、田中大士氏「ほととぎす詠の成立—家持季節歌の性格—」(『国語国文』五八一—九、平成元年九月)、小野寛氏「家持と越中と霍公鳥」(『高岡市万葉歴史館紀要』一、平成三年三月)、芳賀紀雄氏「遙かなるほととぎすの声—家持の越中守時代

の詠作をめぐって―」（ことばとことのは）一〇、平成五年（二月）等。

- (8) 芳賀紀雄氏（前掲注7論文）は、当該歌の家持作歌の日付（四月）廿二日、が太陽暦の五月三十一日に当たること、越中ではホトトギスの初声はまさしくその頃に聞かれることを指摘した上で、家持がホトトギスの初声を「声の遙けさ」（巻八・一四九四）、「鳴く音遙けし」（巻十七・三九八八）と表現している所から、当該歌の「はろはろに 鳴くほととぎす」もホトトギスの初声と深い関わりを持つとする。実際に家持が初音を聞いたと考えるには、虚構のホトトギス詠を連ねてまで待ちに待った末に初音を聞いた喜びの情が含まれないことに不審があるが、初音を聞いて然るべき時期に、あたかも初音を聞いたかのような表現を以て当該歌が詠出されている点には注目される。

- (9) 高野正美氏「貴族和歌―宴と遊覧の様態―」（『万葉歌の形成と形象』平成六年十一月）

- (10) 橋本達雄氏『全注 卷第十七』

- (11) 呉哲男氏「万葉の『交友』―大伴家持と同性愛―」（『日本文学』四四―一、平成七年一月）

- (12) 「家持・池主の交友観」（『古代文学』三二、平成五年三月）

- (13) 池主の文学的交友観が家持を領導したことについては、注12前掲の拙稿に詳述した。

引用本文は、『万葉集』は日本古典文学全集、『詩品』は高木正一氏訳注『鍾嶸詩品』、『文選』は全釈漢文大系に拠ったが、私に改めた所もある。

〈付記〉

本稿は、平成七年六月の上代文学会例会に於ける口頭発表を基にしたものである。席上、貴重な御意見を賜った諸先生方に、篤く御礼申し上げる。